

発達への願いを輝かす教材研究・授業づくり

白石 正久

しらいし まさひさ
龍谷大学社会学部、本誌編集委員

教材は、教育目標を伝達するために選択された素材であり、教師と子ども、子どもと子どもが形成している教育的関係のなかにあつて、教育の媒介となるすべての文化財のことを言う。

教材の選択は、子どもにとっての教育的価値の具現化である教育目標、子どもの能力と人格のあり様にかかわる発達課題、子どもの興味・志向性ともかかわる生活の歴史と質、その文化財の内的な系統性や構造などを契機とする。

しかし、このようなさまざまな契機を内包したとしても、それが「良い」教材となるためには、文化財の加工・創造という活動が欠かせない。良い教材をつくるために教師は、上記のような諸契機に対する認識を深め、また指導過程のなかで教材が子どもの学習と発達に果たした役割を総括しながら、そのフィードバックによって、さらに良いものに教材を作りこんでいく。

教材研究・授業づくりは、教師の「学問の自由」をはじめとして、権利として保障された自主的民主的な活動であるべきであり、そうであることによって、教材は上記のようなフィードバックの過程のなかで、発達の源泉としての機能をはたすことができるようになる。しかし今日、特別支援教育において、教育目標と教育方法の選択が、教師、子ども、保護者の願いやその共同から離れ、学習指導要領、さらには教育委員会の恣意によって規定されるなかにあつて、教材研究・授業づくりはその発展の原動力を抑制されかねない状況にある。

やや立ち入るならば、従来からつづく生活単

元学習などを主たる内容とするような教育課程は、経験の対象そのものが教材であり、経験の事実がそのまま教育目標となる。そこでは、子どもに、何をもって何を学ばせようとするのかという教育目標と教材の議論、また子どもの発達要求のあり様は不問にふされたままになる。

今日、発達状況や障害特性への認識が強調される特別支援教育になったが、もっぱら子どもを対象化して、「弱さ」「できなさ」などの困難点を見出し、その克服を教育目標とするようなことが一般化しつつある。

しかし、このようなときにあつても多くの教師は、仲間とともに子どもたちと向きあい、胸を張って「教材」と呼べるものを創ってきた。本特集において、このような教師たちの教材研究・授業づくりの実践を紹介していくことは、教材とは何かを問い、そのとりくみを励まし広げていくために意義深いことであろう。

本特集は構成において、まず教材とは何か、教材研究の主体であるべき教師の権利はいかに保障されるべきかというテーマに応える論文を置き、つづいてその具体化である重症児教育、知的障害児の性教育について歴史的な整理と提言を試み、さらに教材研究の一つの契機となるべき発達や生活史の認識について論じた。そして各地・各教科の教材研究・授業づくりの実践と研究運動を紹介することとした。

本特集が、子どもへの愛情を胸に、教材研究・授業づくりに力を込める多くの教師に、連帯の心を届けるものになることを願いたい。